

平成27年
6月13日(土)～14日(日)、長野市戸隠の宿坊及び一夜山において題記研修会が開催され、30名(常任



12名、栃木・埼玉・神奈川・長野の各山岳連盟自然保護委員など18名)が参加した。第一日目は宿坊にて講演2題と懇親会、第二日目は一夜山への巡検登山を行った。

昨年の常任研修で利用した奥多摩御嶽神社の宿坊と姻戚関係であることもあり、山岳信仰についても学習を重ねようと、今回の実施になった。

第一日目は、「NPOみどりの市民の会」理事の田中守氏を講師に迎え、飯綱・戸隠に於ける携帯トイレ事情を、次いで「宿坊・極意」主人であり、「戸隠神社 聚長(しゅうちょう)」の極意憲雄氏から戸隠信仰の歴史を、それぞれ一時間ほどのレクチャーを聴いた。概要は以下の通り。

(田中守氏講演概要)

早池峰で始まった携帯トイレ普及促進に教化を受け、長野市の予算の導入で、2005年に、山頂手前の飯綱神社の先に携帯トイレブースの設置、麓の回収ボックスや、携帯トイレの販売店など、一連の仕組みを作り上げた。携帯トイレは利用者持ちであるが「お試し」用としてブース内に配備された。

当初は、携帯トイレの持ち去りとかブースの誤った利用、回収ボックス以外での途中投棄など問題が多発した。現在ではそのような事態は無くなって、使用済み携帯トイレの回収率が9割となった。

水場の水質検査は10年ほど続けているが、前より大腸菌の検出が減っており、頂上ブースの設置が途中の用便放置の減少につながったのではないかと考えられるとした。

バイオ技術を使ったハイテクトイレが各地山岳で稼働しているが、上手く稼働していることを聞かない。糞尿分離のトイレが効果ありと聞くが、大量の電力や、分離した尿の処理などに課題があるようだ。かといって、携帯トイレが万能であるとも言えず、災害時などの実際例から、集中的排出される使用済み携帯トイレの焼却処理がパンク状態になったことがある。何れも決定的とは言えない課題を抱えながらの使用であることを配慮しておく必要がある。携帯トイレの廃棄には、やはり回収システムと連携が

必要であることを認識すべきである。登山者には山頂のトイレブースから麓にある回収ボックスまで確実に持ち運び、回収ボックスからは地元行政や回収業者が処理をするといった棲み分けが明確にあるべきである。自宅まで持ち帰るにはかなりの無理がある。自宅に持ち帰った場合にしろ、「紙オムツ」という名目扱いで、一般ごみの扱いとはなっていない理解しておく必要がある。また、使用を熟知した人たちの間では洗濯にて再使用をしている例もある。

「携帯トイレを利用にあたっては、使い方や利用の仕方について正しい知識をそれぞれの利用者に期待する。登山者の方々には、トイレブースや回収ボックスの場所などを含め、入山時にはその山域の情報を事前に得ておくべきである。」と結んだ。

(極意憲雄氏講演概要)

聚長というのは戸隠神社独特の呼び方で、一般に言う御師とか神官と同じ意味合いで、代々神明奉仕をその職としており、その傍ら全国から集まる信者に祈祷の取次ぎや、宿泊等の便宜を図ることを家業としている。山岳信仰のメッカだった頃「能海防」と名乗り、江戸時代初期に寺格昇進に伴い「徳善院」と改め、明治の廃仏毀釈以降は「極意」と俗姓を名乗り現在に到っていると言う。

戸隠山の開山は、天岩戸神話に由来し、時代は下って平安時代末には役行者にもつながる修験道の道場にもなったが、平安2宗(天台・真言)の争いや、戦国時代(上杉・武田)の騒乱にも巻き込まれ壊滅的な打撃を受け、すっかり衰退してした。江戸時代に徳川家康の庇護を受け、修験道とは切り離され、農業、水の神としての性格が強まり、山中は門前町に整備されるなどして、関東・中部・北陸を中心に戸隠講も生まれ、広くその信仰を集めたと言う。明治時代に入ると神仏分離令や修験宗廃止令が出され、廃仏毀釈運動から、寺を分離して神社となり、宗僧は還俗して神官となったという。

二つの講演のあと行われた懇親会では宮本義彦長野山協顧問の発声により戸隠神社お神酒で乾杯し、長野県の山岳環境保全のことを希に懇親を深めた。

第2日目、宿坊で「朝のお勤め」に全員参加。神前への祝詞に続いて般若心経が挙げられた。神仏混淆の名残が今もなお息づいている。奇妙な感覚を味わった時間となった。

そのあと、「一夜山」へ巡検登山に向かった。長野山協の委員から、地元「鬼無里」に伝わる鬼女の伝説や自然解説受け、往復約3時間の巡検登山を行った。鬼無里の里で「オヤキ」で昼食を摂った後解散となった。